原 著

他者の嫌悪に対処する方略についての幼児の知識

旭川大学女子短期大学部 小 嶋 佳 子¹

Preschoolers' knowledge of strategies in coping with other's disgust

Yoshiko Kojima

Asahikawa University Women's Junior College, 3-23, Nagayama, Asahikawa 079-8501

In Experiment 1, 54 preschoolers (mean age: 5 years 1 month) and 40 slightly older ones (mean age 5 years 11 months) were read a story in which an agent's actions were immoral, and the recipient of the action expressed disgust by gesture. Participants were then asked to explain how they would act if they were the agent. Prosocial answers were most frequently reported regardless of age, while antisocial coping behaviors were more frequently reported by younger rather than older children. In Experiment 2, 23 preschoolers (mean 5 years 3 months), and 22 slightly older ones (mean age 6 years) were read stories in which a recipient's disgust was expressed by the action of an agent. There were two kinds of stories: In one story, the agent elicited disgust from the recipient intentionally; in the other, disgust was elicited by accident. In both stories, the recipient's disgust was expressed verbally. Almost all answers for both situations were prosocial. Furthermore, there were no significant difference in responses between the younger and older participants. These findings suggest that children possess appropriate knowledge of an agent's strategy in coping with recipient's disgust.

Key words: disgust, prosocial coping, preschoolers

対人的相互作用の場で自分の行為が相手にネガティブな感情を感じさせた場合、その感情をポジティブに変えることが、その相手との良い関係を維持するために重要であろう。相手の感情にまったく対処しなければ、その人物から否定的な評価、態度あるいは反応を向けられる危険がある。

基本的感情の中のネガティブ感情である嫌悪と怒りは、他者の不道德な行為に対して生じうる（イザード, 1991/1996; Rozin, Haidt, & McCauley, 1993）。したがって、嫌悪も怒りも対人関係を調節する機能の特に強い感情であると考えられる。これらの感情を感じたときにとる典型的な行動は、嫌悪においては、怒りにおけ

るより、一般に回避的で、あまり外在化されない（Wallbott & Scherer, 1988参照）。それ故、他者とのよりよい関係を維持する上で、相手の反応がわかりにくい嫌悪はこの感情を他者に与えていないかどうかを特に配慮する必要があるだろう。そこで本研究は、ネガティブ感情の中でも嫌悪に注目し、他者の嫌悪を引き起こした場合における対処方略の知識について検討することを目的とした。

ところでDenham & Couchoud (1991) は、状況から他者の感情を推測する能力が高いほど、他者（大人）のネガティブな感情への反応が向社会的になることを、就学前児において示している。この結果は、嫌悪の場合も、他者の嫌悪

1 実験にご協力頂きました幼稚園、保育所の園児の皆様、先生方に心より御礼申し上げます。また本論文の作成にあたり、貴重なご助言を頂きました広島大学大学院教育学研究科松田文子教授、同研究科湯澤正通助教授に厚く御礼申し上げます。

の推測における差が、他者に対して向社会的に対処するかどうかに影響することを示唆する。したがって、他者の嫌悪の推測が発達途上にある年代で、嫌悪への対処方略について調べることが重要になるであろう。小嶋（2001）によれば、幼稚園、保育所の年中児と年長児では、状況から他者の嫌悪を推測する能力に差があった。年長児と大人の間にも若干の差がみられたが、年中児との差ほど大きくなく、5、6歳において嫌悪の推測が急速に発達することが示された。そこで本研究は、対象年齢を年中児、年長児とした。

さて、嫌悪を対象としたものは皆無であるが、より一般的な他者のネガティブな感情に対する幼児の対処については、これまでに様々な研究者が調べている（e. g., Bernzweig, Eisenberg, & Fabes, 1993; Fabes, Eisenberg, McCormick, & Wilson, 1988; McCoy & Masters, 1985）。これらの先行研究は、就学前の幼児でも、他者のネガティブな感情を取り除くような方略を持っていることを明らかにしている。また、チャンスがあれば、自分が他者の感情、特にネガティブな感情を変える担い手になりたいという動機を4、5歳児は持っていることも示されている（Carlson, Felleman, & Masters, 1983）。ただし、これらの研究では、いずれも他者のネガティブな感情の喚起とは直接関係のない第三者の対処法を参加者に尋ねていた。しかし対人関係の調節という観点からすれば、他者の感情を引き起こした当事者の対処の方がより重要だろう。

Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Chapman (1992) によると、1、2歳児は自分の行為が他者のネガティブ感情を引き起こした場合は傍観者の時と比べて、自分が苦痛を感じたり、攻撃的になったりすることが多い。また幼児（平均6歳1か月）や小学2年生（平均8歳2か月）は自己の苦痛に対して回避的方略をとる傾向が高い（Bernzweig et al., 1993）。Eisenberg & Fabes (1998) によると、自己の個人的な苦痛によって向社会的行動が生じるの

は、他者の苦痛を取り除くように振る舞うことが、自己の苦痛を取り除く方法として最も簡単な場合のみである。したがって、自分が他者の嫌悪の原因である場合は、たとえ適切な対処方略を知っていたとしても、他者の嫌悪などによって自己が苦痛を感じ、他者のネガティブ感情への対処としては不適切な、問題からの回避といった対処方略を採用するかもしれない。そこで本研究では、相互作用の相手に嫌悪を感じさせた人物の立場をできるだけとるように参加者を促し、嫌悪への対処方略の知識について検討した。

実験 1

方法

参加者 本実験の参加者は、一地方都市の幼稚園と保育所に通う年中児54名、年長児40名であった。後述の記憶の確認の手続きにおいて、物語を正確に思い出せなかった年中児6名と年長児3名のデータは分析から除いたので、分析の対象となった参加者は年中児48名（男児26名、女児22名、平均5歳1か月、4歳5か月～5歳8か月）、年長児37名（男児19名、女児18名、平均5歳11か月、5歳5か月～6歳4か月）であった。

物語 2人の幼児の遊び場面における対人的相互作用を示した物語を2つ作成した。各物語の最後では、一方の登場人物（「行為者」）の不道德な行為が、相互作用の相手であるもう一方の登場人物（「受け手」）の嫌悪を引き起こした。以下、これらの物語を嫌悪物語と呼ぶ。Table 1は嫌悪物語の内容を示したものである。また、「行為者」が常にいじわるな子どもだという印象を参加者に与えないようにするために、「行為者」の行為によって「受け手」が嬉しさを感じるような物語も2つ作成した（ただし、これらに対する反応は結果の分析の対象としなかった）。各物語に、男性用（登場人物がすべて男児）と女性用（登場人物がすべて女児）があり、物語は、その内容を表現する3枚のカラー図版と朗読を録画したVTRを用いて提示した。1、2枚目の図版は対人的相互作用の様子を、3枚目は、「受

け手」の嫌悪または嬉しさを表す身振りを示していた。いずれの図版でも登場人物の表情は描かれていなかった。なお、年中児でも、本実験で使用した嫌悪物語において、「受け手」が嫌悪を感じるということを推測できることは、小嶋(2001)によってすでに確かめられている。

対処方略の選択肢 「行為者」の対処方略について自発的な回答が得られない場合のために、向社会的対処、反社会的対処、非社会的対処の3種の対処方略を選択肢として用意した。対処方略はそれぞれカラー図版1枚とTable2に示した朗読で表現した。選択肢の図版においても、登場人物の表情は描かれていなかった。対処方略はBlechman, Prinz, & Dumas (1995)に基づいて設定した。彼らによると、向社会的対処とは、他者と自己の両方にとって望ましい結果となるように考慮した行為である。反社会的対処とは、自己の満足への配慮を優先した行為で、他者に対して取る攻撃的な行為を含む。そして非社会的対処とは不愉快な状況から逃れようとする行為で、他者を無視したり、問題となる状況から回避するような行為を含む。選択肢の作

成にあたり、幼稚園教諭(男性1名)の意見を参考にした。

手続き 実験は個別に行った。最初に「行為者」を描いた図版を参加者に見せ、「この子は月子ちゃん(次郎くん)と言います。○○ちゃん(○○くん)は月子ちゃん(次郎くん)のつもりになってビデオを見てね」と教示した(「行為者」の図版は、常に参加者に見えるところに提示しておいた)。そして物語のVTRを1つずつ4インチのモニター(Victor GR-DVL)に提示した。提示順序は参加者間でカウンター・バランスを取った。物語ごとに3枚目の図版でVTRを静止し、「○○ちゃん(○○くん)が月子ちゃん(次郎くん)だったら、この後どうするかな」と参加者に「行為者」の立場をとるように促して、その対処方略を尋ねた。自発的な回答がない場合は、実験者が選択肢として用意した対処方略の内容(Table2参照)を説明しながら、各対処方略を表現した3枚の図版をランダムな順番で並べ、その中から選択させた。対処方略についての質問のあと、「今、何をしていたかな」と参加者が物語の内容を覚えているかどうかを

Table 1 実験1で用いた嫌悪物語の物語名とその内容

物語名	図版	各図版に付加した朗読の内容
基地	1枚目	「行為者」は基地を作っていました。
	2枚目	「受け手」も基地を作りたいかったので「入れて」と言いました。「行為者」は「『受け手』は入っちゃダメ」言いました。
	3枚目	「受け手」は自分の手をぎゅっと握りしめて下を向きました。
積み木	1枚目	「受け手」は積み木で遊んでいました。
	2枚目	「行為者」がやってきて、「受け手」の使っていた積み木を取っていきました。
	3枚目	「受け手」は積み木遊びをやめました。

注 女性用では「受け手」のところが花子ちゃんとなり、「行為者」のところが月子ちゃんとなる。
男性用の場合、「受け手」のところが太郎くん、「行為者」のところが次郎くんとなる。

Table 2 実験1の嫌悪物語に対して用意した対処方略の選択肢の内容

物語名	対処方略	朗読の内容
基地	向社会的	「行為者」は「一緒に作ろう」と言いました。
	反社会的	「行為者」は「受け手」に「邪魔だよ、あっちへ行って」と言いました。
	非社会的	「行為者」は「受け手」のことは気にしないで、一人で基地作りを続けました。
積み木	向社会的	「行為者」は「ごめんね」と言って積み木を返しました。
	反社会的	「行為者」は「受け手」の作っていた家を壊して、もう一つ積み木を取りました。
	非社会的	「行為者」は「受け手」のことは気にしないで、一人で積み木遊びを続けました。

確かめた。前述したように、ここで正確に物語の内容を答えられなかった9名の参加者のデータは分析から除いた。

結果と考察

嫌悪物語に対する「行為者」の対処方略についての回答のうち、59.4%が自発回答であった。自発回答は、選択肢と同様の向社会的、反社会的、非社会的対処に2名の評定者（筆者と心理学専攻の大学院生）が独立に分類した。分類の一致率は91.1%、3つのカテゴリーに分類できなかった回答が4個あった。分類が一致しなかった回答については、評定者の話し合いにより決定した。

参加者ごとに、2つの嫌悪物語において各対処方略のカテゴリーに分類された回答の数を求め、この数によって参加者を分けた。Figure 1にその結果を示した。対処方略ごとに、弓野(1981)に従って、年齢(2)×性(2)×回答数(3)の対数-線型モデル分析を行った(有意水準5%)。

Figure 1 対処方略の回答数別にみた参加者の割合(実験1)。グラフ上の数字は、各カテゴリーの人数を示す。

年齢や性によって、回答の内容が異なるかどうかを調べることがこの分析の目的であるので、飽和モデルを当てはめた。

向社会的対処の回答数に基づく分析では、回答数2と0のカテゴリーにおいて、回答数の主効果のみが有意であった(それぞれ、 $\hat{u}3(1)=0.79$; $\hat{u}3(3)=-1.00$)。このことは、年齢や性に関わらず、2つの嫌悪物語の両方において向社会的対処を回答する参加者が多く、この対処方略をまったく回答しなかった参加者が少ないことを示している。また、反社会的対処でも、回答数の主効果のみが回答数2と0のカテゴリーで有意であった($\hat{u}3(1)=-1.42$; $\hat{u}3(3)=1.97$)。すなわち、2つの嫌悪物語の両方ともに反社会的対処を回答する参加者は少なく、ほとんどの参加者がこの対処方略をまったく回答しなかった。非社会的対処でも、回答数2と0のカテゴリーで回答数の主効果が有意であり($\hat{u}3(1)=-1.52$; $\hat{u}3(3)=1.14$)、さらに、回答数0での年齢×回答数の交互作用にも有意な傾向がみられた($\hat{u}13(13)=-0.40$; $\hat{u}13(23)=0.40$, $ps<.10$)。年齢の主効果も有意傾向があった($\hat{u}1(1)=0.34$; $\hat{u}1(2)=-0.34$, $ps<.10$)。これらの結果は、年中児は年長児に比べて非社会的対処を答える傾向が強いことを示している。

上記の分析において性の効果はまったく有意でなかったもので、男女をこみにして、各対処方略の平均回答数を算出した。年中児、年長児の順に、向社会的対処の平均回答数(SD)は1.38(0.70)、1.57(0.64)、反社会的対処の場合は0.10(0.31)、0.11(0.39)、非社会的対処の場合は0.52(0.61)、0.22(0.41)であった。これらの平均値に基づき、対処方略別に、有意水準5%で年齢差を検定した結果(有意水準5%)、やはり、非社会的対処のみで年齢差が有意で、年中児は年長児よりもこの対処方略の回答数が多かった($F(1, 83)=6.64$)。

以上の結果より、年中児でも、他者のネガティブな感情をポジティブなものに変えるような対処方略をある程度は知っており、年長児と同様に、自分の不道德な行為によって他者に嫌悪を

感じさせた場合は、このような対処方略をとるべきであると考えることが多いといえよう。また、攻撃的に対処すべきではないということも年中児の段階では理解できている。ただし、年中児は年長児と比べて相互作用の相手を無視したり、回避したりするような非社会的対処を回答する傾向が強かった。したがって、このような対処の減少に、年中児から年長児にかけての主な発達が反映されているといえよう。

ところで、本実験の嫌悪物語において示されていた「行為者」の行為はすべて不道德なものであった。したがって、幼児の回答あるいは選択した対処方略が、「受け手」の嫌悪を変えることを目的としたというより、不道德な行為を取り繕うことを目的としたものである可能性がある。この点を明らかにするため、実験2を行った。

実験 2

実験2の目的は、実験1での幼児の示した対処方略が、「受け手」の嫌悪に対処しようとしたものであるのが、不道德な行為を取り繕うことを試みたものであるのかを明らかにすることである。そのため、主に以下の2点で実験1と方法が異なる。まず、嫌悪の原因となる「行為者」の行為が意図的な場合と非意図的な場合の2種類の物語を作成した。参加者が「受け手」の感情に配慮しているならば、嫌悪の原因となる行為の意図性に関わらず、向社会的対処が示されるだろう。なお、行為の意図性によって、「受け手」の感じる嫌悪の強さは通常異なると考えられるが、実験2では「受け手」が強く嫌悪を感じているということを言葉で述べることにより、「受け手」の嫌悪の強さを統制した。第2の変更点は、対処方略の理由について尋ねたことである。参加者が「受け手」の感情に配慮しているならば、理由として「受け手」の嫌悪をあげたり、対処後の「受け手」の感情について述べたりすると予測される。行為を取り繕うことを考慮しているならば、「行為者」の行為の不道德性など規範意識に関わるようなことを理由とし

て述べるだろう。このように、対処方略の理由からも、参加者が「受け手」の感情に配慮しているのかどうかを明らかにできるだろう。

方法

参加者 実験2には、実験1と同じ都市の幼稚園と保育所に通う年中児23名、年長児22名が参加した。いずれも実験1には参加していない。なお年中児2名と年長児3名は記憶の確認において物語の内容を思い出せなかったため、分析から除いた。したがって、最終的に年中児21名（男児8名、女児13名、平均5歳3か月、4歳10か月～5歳9か月）と年長児19名（男児10名、女児9名、平均6歳0か月、5歳5か月～6歳6か月）のデータを分析した。

物語 「行為者」が「受け手」に嫌悪を感じさせるような行為を意図的にとる故意版の物語と、偶然とる過失版の物語を2つずつ、計4つの物語を作成した（以下これらの物語を嫌悪物語とする。なお、実験1と同じ理由から「受け手」が嬉しさを感じるような物語も2つ提示した。以下、これらの物語を嬉しさ物語とする）。Table3に本実験で用いた嫌悪物語の名前と内容を記述した。物語は、3枚のカラー図版と朗読を録画したVTRを用いて提示した。なお、故意版と過失版では、2枚目の図版に付加する朗読の内容が異なる（Table3参照）。また「受け手」が感じている感情（嫌悪）を、3枚目の図版に付加する朗読で明確に述べた。全ての参加者に、故意版と過失版の両方を提示した。そこで、参加者が混乱しないように、同じ物語の故意版と過失版では、図版の構図は同一であるが、登場人物の名前や髪型、服装を変えた。

幼児が故意版と過失版を区別できることを確認するために、実験2の参加者とは別の保育所の年中児の男女19名（平均5歳0か月、4歳4か月～5歳7か月）、年長児の男女17名（平均5歳11か月、5歳5か月～6歳2か月）に各物語の2枚目までの図版と朗読をVTRで1つずつ提示し、「行為者」の行為を3段階（「とても悪い」、「少し悪い」、「悪くない」）で評定させた。「と

でも悪い」を2、「少し悪い」を1、「悪くない」を0として平均 (*SD*) を求めると、年中児では、故意版、過失版の順に1.50 (0.49)、0.58 (0.69)、年長児では1.53 (0.27)、0.32 (0.38) であった。これらの評定値に基づく年齢(2)×物語の種類(2)の2要因分散分析の結果、物語の種類の主効果のみが有意であった ($F(1, 34) = 113.48, p < .001$)。この結果は、年中児ぐらいであれば、故意版で提示された行為は悪いと認識でき、過失版で提示された行為は、それほど悪くないと認識できることを示す。

対処方略の選択肢 実験1と同様に対処方略の選択肢を3つ作成した。Table 4に「おしあいこ」での選択肢の内容を記載した。この選択肢の内容は、幼稚園教諭(女性1名)の意見を参考にして決定した。「基地」は実験1の「基地」と内容がほぼ同じなので、対処方略の選択肢も実験1と同じ内容のものを用了。また、これらの選択肢の内容は、故意版と過失版で共通して使用したが、登場人物の名前や髪型、服装については物語と対応させた。

手続き 実験は個別に、1人の参加者に対して2回ずつ実施した。1回目と2回目の実験は別の日に行った。それぞれの日において、故意版の物語と過失版の物語、および嬉しさ物語を1つずつ提示した。同一の実験日に提示する物語の登場人物は統一した。また、同じ物語の故意版と過失版は別の日に提示した。物語の提示順序は参加者間でカウンター・バランスを取った。

各物語ごとに、まず「行為者」の対処方略について質問し、自発または選択肢による回答を得た後、物語の内容を覚えているかどうかを確認した。物語の内容を正確に思い出せなかった参加者5名のデータは分析の対象からはずした。記憶の確認の後、対処方略の理由について尋ねた。例えば対処方略の質問に対して「太郎くん(『受け手』の名前)と一緒に作ろうと言う」と回答した場合は、「どうして太郎くんと一緒に作ろうって言うのかな」と質問した。

Table 3 実験2で用いた嫌悪物語の物語名とその内容

物語名	図版	各図版に付加した朗読の内容
おしあいこ	1 枚目	「受け手」と「行為者」はおしあいっこをしていました。
	2 枚目	故意：「行為者」はわざと何回も「受け手」を叩きました。 過失：足がすべって「行為者」の手が「受け手」にあたってしまいました。
	3 枚目	「受け手」はすごくいやだと思って、おしあいっこをやめました。
基地	1 枚目	「行為者」は基地を作っていました。
	2 枚目	故意：「受け手」も基地を作りたかったので「入れて」と言いました。でも「行為者」は、わざと「受け手」の声が聞こえないふりをしました。 過失：「受け手」も基地を作りたかったので「入れて」と言いました。周りがとてもうるさくて、「行為者」には「受け手」の声が聞こえませんでした。
	3 枚目	「受け手」はすごくいやだと思って、下を向きました。

注 故意版の物語では、故意の文章の朗読を、過失版の物語では、過失の文章の朗読をそれぞれ2枚目の図版に付加した。「受け手」と「行為者」のところには、Table 1の場合と同様に名前が入る。

Table 4 「おしあいこ」に対して用意した対処方略の選択肢の内容

対処方略	朗読の内容
向社会的	「行為者」は「受け手」を追いかけていって、「ごめんね」と言いました。
反社会的	「行為者」は「受け手」を追いかけていって、「受け手」をもっと叩きました。
非社会的	「行為者」は「受け手」のことは気にしないで、一人で積み木で遊び始めました。

注 選択肢の内容は故意版と過失版に共通して用いた。登場人物の名前は物語に対応させた。

結果と考察

対処方略 対処方略についての自発回答の割合は、嫌悪物語に対する回答全体の73.1%であった。自発回答については、実験1と同じ評定者2名が向社会的、反社会的、非社会的対処に分類した（本実験でも、嬉しさ物語に対するデータは分析からはずした）。一致率は96.4%で、3つのカテゴリーに分類できなかった回答は1個であった。

各参加者において故意版と過失版別に向社会的対処、反社会的対処、非社会的対処に分類される回答の数を求め、この回答数によって参加者を分けた（Figure 2）。なお、性の効果の検討は本研究の主な目的ではなく、また実験1において性の効果がまったくなかったため、ここでは最初から男女こみにして結果を整理した。

故意版と過失版での向社会的対処の回答数の差に、年齢による違いがあるかどうかを確かめるため、回答数2に分類される参加者の割合における年齢（2）×物語の種類（2）の交互作用を、標準得点による検定法（岡、1990）を用いて検

討した（物語の種類は参加者内要因なのでこの検定法を用いた）。反社会的対処、非社会的対処では回答数2に分類される参加者がいなかった。回答数1に当てはまる参加者の割合において年齢（2）×物語の種類（2）の交互作用が見られるかどうかを同様の方法で検討した。分析の結果、有意な交互作用はまったくみられなかった（向社会的対処、反社会的対処、非社会的対処の順に、 $z_s=0.58, 1.04, -0.80$ ）。すなわち、いずれの対処方略でも、故意版と過失版での回答数の差が年齢によって異なるということはない。

そこで年齢をこみにして各対処方略の平均回答数を求めたところ、向社会的対処の平均回答数（SD）は、故意版、過失版の順に1.88（0.40）、1.85（0.42）、反社会的対処では0.05（0.22）、0.05（0.22）、非社会的対処では0.05（0.22）、0.10（0.30）と、ほとんどの回答が向社会的対処であった。これらの平均回答数においても、物語の種類の差はまったく有意でなかった（向社会的対処、反社会的対処、非社会的対処の順に、 $F_s(1, 39)=0.11, 0.00, 0.66$ ）。したがって、「受け手」の感情（嫌悪）を言葉で明確に示した場合、年中児は年長児と同様に、嫌悪を引き起こした行為の意図性に関係なく、取るべき対処方略として向社会的対処を簡単に回答できるといえる。

向社会的対処の理由 向社会的対処に対する理由を、実験2の目的に基づき、他者の感情に配慮した理由（例：『受け手』がかわいそうだから、『受け手』が悲しそうだから、「二人ともいい気持ちになるから」と規範意識に言及した理由（例：「悪いことだから」、「そうしないといけない」）に、これまでと同様の評定者が分類した（一致率96.8%）。分類が一致しない場合は、評定者で話し合って決定した。なお、年中女児のうち1名は故意版の物語の全てに、他の年中女児1名は過失版の物語の全てに、向社会的対処以外の対処方略を回答していたので、この2名のデータは理由の分析からはずした。

物語の種類別に、参加者ごとに他者の感情に

Figure 2 対処方略の回答数別にみた参加者の割合（実験2）。グラフ上の数字は、各カテゴリーの人数を示す。

配慮した理由の数を求め、向社会的対処を回答した物語の数で割った。この数値は、向社会的対処を回答した物語 1 個あたりの、他者の感情に配慮した理由の数を示す。規範意識に言及した理由についても、同様の数値を算出した (Table 5)。Table 5 の平均値に基づき、年齢 (2) × 物語の種類 (2) の 2 要因分散分析を、理由のカテゴリー別に行った。その結果、他者の感情に配慮した理由の回答数は、年中児でも年長児でも過失版の方がやや多かったものの、有意な主効果や交互作用はまったくみられなかった (それぞれ $F_s(1, 36) = 0.00, 2.47, 0.89$)。この結果からは、年中児、年長児ともに、嫌悪の原因となる行為が意図的かどうかに関わらず、「行為者」の対処方略を答える際に、「受け手」の感情に配慮していると推測される。他方、規範意識に言及した理由に関しては、物語の種類の主効果が有意で ($F(1, 36) = 4.56$)、故意版において規範意識に言及するような回答が多かった。年齢の主効果と年齢 × 物語の種類の交互作用は有意でなかった ($F_s(1, 36) = 0.05, 0.06$)。したがって、年中児や年長児は故意版と過失版を区別しており、故意版のように行為自体に問題がある場合はその行為を取り繕うために対処することがより多くなることが示唆される。なお、データの独立性の問題があるためカテゴリー間の差の検定はできないが、少なくとも平均値においては、規範意識に言及した理由と比べて、他者の感情に配慮した理由がかなり高かった。

総 合 考 察

本研究の結果より、幼稚園、保育所の年中児や年長児、すなわち 4～6 歳程度の幼児でも、良く見知った場面であれば、他者の嫌悪を取り

のぞき、ポジティブな感情に変えるような対処方略を知っていることが明らかになった。

ただし、実験 1 では、年長児に比べて年中児は非社会的対処を回答する傾向が強かった。他方、実験 2 ではこのような年齢差がまったくみられなかった。したがって、本研究で提示した程度の状況に対処するために必要な方略の知識については、年中児も年長児と同程度に保有しており、実験 1 で示された年齢差は知識の問題によるものではないと推察される。では、この年齢差の原因は何であろうか。

実験 1 では、小嶋 (2001) において年中児でも「受け手」の嫌悪を推測できることの確認された物語を用いていた。ただし、本研究の手続きにおいては、「受け手」の感情を推測するために、小嶋 (2001) よりも複雑な視点取り能力 (澤田, 1996 参照) が必要であった。おそらく年中児は複雑な視点取り能力が十分に発達しておらず、「受け手」の感情についての言語情報のない実験 1 では、「受け手」の嫌悪を推測することが、小嶋 (2001) より困難になっていたのだろう。したがって、このような視点取り能力の発達程度が、年齢差の原因の 1 つと考えられる。

他方、実験 2 においては、「受け手」の感情についての言語情報が幼児に足場 (scaffolding) を与え、幼児の注意を「受け手」の嫌悪に向けさせたのだろう。その結果、向社会的対処が促進され、年齢差もなくなったのではないだろうか。対処のターゲットとなる人物の感情をラベリングすることが、幼児に足場を与え、向社会的対処を促進するという結果は、Denham, Mason, & Couchoud (1995) においても得られている。

また実験 2 では、「行為者」の行為の意図性に

Table 5 向社会的対処を回答した物語 1 個あたりの、他者の感情に配慮した理由の数の平均 (SD) と規範意識に言及した理由の数の平均 (SD)

物語の種類	他者の感情に配慮		規範意識に言及	
	年中児 ($n=19$)	年長児 ($n=19$)	年長児 ($n=19$)	年中児 ($n=19$)
故意版	.42 (0.37)	.34 (0.40)	.21 (0.30)	.21 (0.30)
過失版	.47 (0.41)	.55 (0.51)	.08 (0.18)	.11 (0.20)

ついて3枚目の図版に付加する朗読で明確に述べていたが、実験1では、この点がはっきりと示されていなかった。このことより、行為の意図性を認知する能力の発達も、実験1でみられた年齢差の原因の一つである可能性が考えられる。

なお、実験2の方が実験1よりも向社会的対処が多くみられた。上述のように実験1と2では「受け手」の感情の明確さと「行為者」の行為の意図性の明確さのいずれもが異なっていた。それ故、どちらの要因がより強く実験間の差に影響していたのかについては、さらに調査を行い検討する必要があるだろう。ただし、実験2の向社会的対処の理由の分析において、幼児は嫌悪を引き起こした行為の意図性の違いを区別していることが示唆されるにも関わらず、対処方略では行為の意図性の効果がみられなかった。また他者の感情に配慮した理由の数は、過失版の方が故意版よりも多いものの、その差は有意でなかった。

以上より、向社会的対処の発現には他者の嫌悪についての情報が影響しており、少なくとも行為の意図性が明白である場合は、嫌悪の原因となる行為の性質よりも他者の嫌悪の方が重要であると推測される。さらに、これらの結果から、嫌悪は対人関係を調節する機能の強い感情であり、年中児、すなわち4、5歳頃から、すでに嫌悪がこの機能を果たしていることが明らかである。このように、発達の早い段階で嫌悪が対人関係を調節する機能を果たしていることは、他者の感情に配慮した理由が他の理由より多かったことから支持される。

ところで、スメタナ(1993/1995)によると、道徳に対する違反の文脈では、大人も子どもも、不道徳な行為がその行為の受け手に与える影響をフィードバックするようなやり方で反応することが多い。例えば、子どもの不道徳な行為(叩く、押すなど)に対して、大人はその不道徳な行為をとった子どもに、犠牲者の視点に立つように促す。子どもも、かなり年少のうちから他者の不道徳な行為に対して泣いたり金切り声を

あげたりと、感情的に反応する。おそらく、幼児はこのような経験を通して、嫌悪が相互作用の相手の感情に対処することを促す合図であることを学習しているのだろう。そして、他者の嫌悪の推測が可能であれば、あるいは嫌悪を推測するための足場が与えられれば、この感情に注意を向け、他者との関係を維持するような、適切な対処方略を答えることが可能であるといえよう。したがって、相互作用の相手の嫌悪といったネガティブな感情に気づかせることは、向社会的性の発達にとってプラスになると考えられる。

引用文献

- Bernzweig, J., Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1993 Children's coping in self- and other-relevant contexts. *Journal of Experimental Child Psychology*, 55, 208-226.
- Blechman, E. A., Prinz, R. J., & Dumas, J. E. 1995 Coping, competence, and aggression prevention: Part 1. Developmental model. *Applied & Preventive Psychology*, 4, 211-232.
- Carlson, C. R., Felleman, E. S., & Masters, J. C. 1983 Influence of children's emotional states on the recognition of emotion in peers and social motives to change another's emotional state. *Motivation and Emotion*, 7, 61-79.
- Denham, S. A., & Couchoud, E. A. 1991 Social-emotional predictors of preschoolers' responses to adult negative emotion. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 32, 595-608.
- Denham, S. A., Mason, T., & Couchoud, E. A. 1995 Scaffolding young children's prosocial responsiveness: Preschoolers' responses to adult sadness, anger, and pain. *International Journal of Behavioral Development*, 18, 489-504.

- Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1998 Prosocial Development. In N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (5th ed.). New York: John Wiley & Sons. Pp.701-778.
- Fabes, R. A., Eisenberg, N., McCormick, S. E., & Wilson, M. S. 1988 Preschoolers' attributions of the situational determinants of others' naturally occurring emotions. *Developmental Psychology*, **24**, 376-385.
- イザード, C. E. 莊巖舜哉 (監訳)・比較発達研究会 (訳) 1996 感情心理学 ナカニシヤ出版 (Izard, C. E. 1991 *The psychology of emotions*. New York: Plenum Press.)
- 小嶋佳子 (2001) 対人的場面におかれた他者の嫌悪を推測する5、6歳児の能力 心理学研究, **72**, 51-56.
- McCoy, C. L., & Masters, J. C. 1985 The development of children's strategies for the social control of emotion. *Child Development*, **56**, 1214-1222.
- 岡 直樹 1990 質的データの検定法 森敏昭・吉田寿夫 (編著) 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房 Pp.176-216.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. 1993 Disgust. In M. Lewis & J. M. Haviland (Eds.), *Handbook of emotions*. New York: Guilford Press. Pp.575-594.
- 澤田忠幸 1996 感情の理解と表出のルールの発達 発達, **66** (17), 52-58.
- スメタナ, J. G. 首藤敏元 (訳) 1995 社会的ルールの理解 二宮克美・子安増生・渡辺弥生・首藤敏元 (訳), 子どもは心理学者: 〈心の理論〉の発達心理学 福村出版 Pp.153-189.
- (Smetana, J. G. 1993 Understanding of social rules. In M. Bennett (Ed.), *The development of social cognition: The child as psychologist*. New York: Guilford Press. Pp.111-141.)
- Wallbott, H. G., & Scherer, K. R. 1988 How universal and specific is emotional experience? Evidence from 27 countries on five continents. In K. R. Scherer (Ed.), *Facets of emotion: Recent research*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. Pp.31-56.
- 弓野憲一 1981 対数一線型モデルによる質的データの解析とそのためのBASICプログラム 静岡大学教育学部研究報告 (自然科学篇), **32**, 189-215.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M. 1992 Development of concern for others. *Developmental Psychology*, **28**, 126-136.